



ぽっかぽか きりん組



12月になり、寒い日が増えてきました。子ども達は毎日元気に「子ども会」に向けて頑張っています。今年の演目は「かにむかし」という絵本の物語にしました。例年「ブレーメンの音楽隊」なのに何故？と不思議に思われた方もいたかと思います。今回は、「かにむかし」を選んだ理由と魅力、子ども会に向けての活動の様子を書かせて頂きました。

始まりは読み聞かせ ～想像できる楽しさ～

年中に進級した頃から、午睡前の時間に「日本の昔話」を読んでいた。次第に、物語を頭の中で想像できるようになり、楽しめるようになってきました。読み終わると「楽しかった～」「怖くなかったよ」「また聞きたい」など感想を言うようになり、本を眺める子が出始め「このお話が聞きたい」と物語をリクエストされるようになりました。

わらべ歌と同様に日本の昔話は「口語り」。文字ではなく、語り手から聞き手へと伝えられてきた文芸になります。わらべ歌と同様に伝えたいメッセージが隠れているのが魅力の一つです。

日本の文化の一部「日本の昔話」を好きになってくれた子ども達には、「ブレーメンの音楽隊」ではなく、日本の昔話から選びたいと思い、思い切って挑戦することにしました。

悩んだ末、子ども達が物語をイメージしやすいように、絵本の中から「かにむかし」を選びました。

絵本「かにむかし」とは ～昔話 → 劇 → 絵本～

有名な「さるかに合戦」を劇作家の木下順二が再編したものにになります。1951年に戯曲（演劇として上演されることを前提に書かれた文学作品）として発表し、舞台化。1976年に絵本として出版されています。一般的な「さるかに合戦」は、猿の柿の種とカニのおにぎりの交換から始まりますが、佐渡の昔話を元に書かれているため、カキの種を拾うところから始まります。地方によって少しずつ違っている昔話の面白さの一つです。「なかまになるなら やろうたい」などは熊本弁の方言だそうです。子どもたちも大好きです。

「じゅくじゅく」や「コロコロ」など言葉の楽しさや話のテンポが良く、演劇の物語を絵本にした作品のため、劇にしやすい絵本になっています。

台本読みで拍手 ～わたしも大事、あなたも大事～

すぐに物語が大好きになり、劇の台本を渡すと字が読める子たちが進んで読み始めてくれました。まだ読めない子も読める子に言葉を教えてもらい、耳で聞いて覚えるようになりました。ある日、台本を読めるようになったという子に午睡前に台本を読んでもらうと、スラスラとお手本の様に読んでくれました。その姿を見て「私も読みたい！」とお家で練習する子が増え、午睡前の時間に誰かが台本を読むようになっています。驚きなのが、台本の文字の拾い読みで間違えてしまったり、読むのに時間がかかってしまったりしても誰も何も言わないのです。まだ上手に読めなかったとしても読み終わると自然と「拍手」が起きるようになりました。人の間違いを指摘するのではなく、友達の頑張りを認められる。「私も大事、あなたも大事。」が、体現されている。認めてもらえる「安心感」があるからこそ、挑戦できる。とても素敵だなと感動しております。

目的に向かって協力し、表現することの楽しさを ～年中劇の目標は「劇ごっこ」～

グループ活動をしてきたので、役のグループになっても仲間と協力する意識や話し合いが上手でした。セリフに対する動きは、子ども達でアイデアを出し合って決めています。自分たちの劇の道具を作ったり、衣装を自分たちで着て劇遊びを始めたりと再現する楽しさのエネルギーが溢れています。年少は「劇遊び」で、劇を楽しむことが目標でしたが、年中は「劇ごっこ」。再現し役になりきることが目標の一つになります。「子ども会」という目的に向かって、クラスとして成長した姿、表現する楽しさを当日ご覧頂ければと思います。